

# 小学校古典学習において音読は有効か —音読が有効という理由とその方法を探る—

足利市立南小学校 教諭

内田 仁志

## 1 序章

本稿の目的と背景、及び調査対象を述べる。

### (1) 本稿の目的

小学校の古典学習において、教材文を音読させることが有効であるということを検証する。また音読を軸にした効果的な授業モデルを考案する。

### (2) 背景

どうしてその問題に取り組むのか

- ・学習指導要領の改訂により小学校において古典を学習する際には音読を取り入れることになった。<sup>(\*)</sup> しかしそうな問題がある。

①小学校の古典学習と中学校の古典学習の差別化をどのように図るか

②音読指導の有効性が強調されるが、検証されていない

③明確な指導例が報告されていない

④音読指導が中学校では古典に親しませるどころか、古典嫌いの要因にさえなっている

これらの問題を解決するために有効な音読指導の方法を考案、実践しなくてはならない。

### (3) 調査対象と方法

小学校 5 年生学級 30 人

古典に関するアンケート調査

- ・古典に関する知識は非常に浅い。日本の昔話を知っているかについて次のような結果を得た。

	内容も分かる	名前のみ	知らない
浦島太郎	18	9	3
桃太郎	22	5	3
かぐや姫	4	25	1
一寸法師	2	10	18
さるかに合戦	3	17	10

【表 1 日本の昔話を知っているか 単位 人】

- ・古典の学習に対しては高い期待を示している。
- 古典（昔話）を読みたいですか？
- ・読みたい 28人
  - ・読みたくない 2人

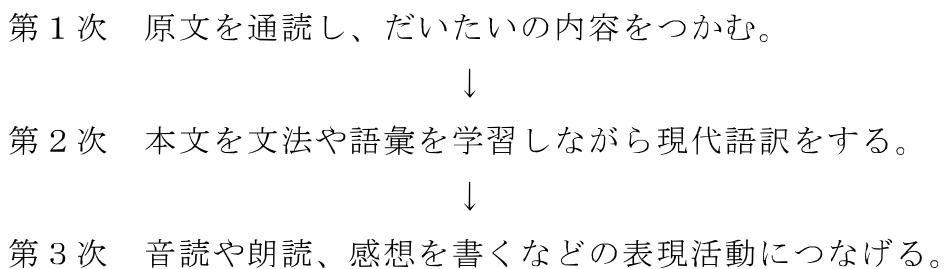
## 2 調査・研究方法

- (1) 中学校との差別化を図る。具体策は以下の通り。
  - ・中学校でも音読指導が行われているが、親しむどころか古典嫌いの原因になっている。その原因の追及。
- (2) なぜ古典に親しませるために音読が有効なのか
- (3) 最適な音読法はどのようにしたらよいか
- (4) 古典の学習が一過性に終わらないための工夫

### 調査の結果

- (1) 中学校との差別化
  - ① 中学校の古典学習の実際
    - ア) 学習指導の過程

現代語訳を中心とした単元構想（表2）で授業が行われているのが一般的



【表2 中高校の単元構想】

- イ) このような学習過程の結果として  
このような単元構想が児童の古典嫌いを招いていることはデータからもはつきり  
裏付けされている。<sup>(\*2)</sup>
- ウ) 文法指導に対して  
特に第2次における文法指導に対して生徒は強い拒否感を示している。<sup>(\*3)</sup>

### (2) 音読の有効性

## ①指摘される音読のマイナス面

- ア) 声を出さない子の存在
- イ) 音読の成果が見えない<sup>(\*)4)</sup>
- ウ) 意味理解を軽んじる結果となる
- エ) 挿絵等が活用されていない
- オ) 古典では中学校の教材がそのまま小学校におりてきている。そこでは文法等の解説が書かれており、文法も暗記しなくてはならない
- カ) 暗唱ができない児童に対して罰を与えるような雰囲気になりかねない<sup>(\*)5)</sup>

## ②古典音読の有効性

- ・アとカについては、学級経営の問題であり、音読の有効性とは何ら関係ないのでここでは論じない。(そもそも声を出さない子がいるから音読が有効でない、などということはあり得ない)
- ・イについて  
短い教材文を選ぶことで個別に朗読を聞いたり、暗唱の成果を見るなどの指導が可能となる。
- ・ウについて  
意味については重視していないので、この指摘はあたらない。
- ・エについて  
導入の指導でこの指摘は解決できる。挿絵やワークシートの活用を図ることで解決する。
- オについて  
文法は指導しないので、この指摘はあたらない。また古典の入門に適した教材は重複しても小中学校でのねらいは違うので支障はない。

## ③古典特有のリズムに慣れる

古典は紙で読まれることを前提に残されない。声で伝承されることを前提に残されている。したがって音読になじむのは当然である。<sup>(\*)6)</sup>

以上のことから古典には音読指導が最も有効である。

### (3) 効果的な音読の指導法

#### ①教材文の選択

- ・全員が同じ教材で学習すること
- ・比較的短く、分かりやすい教材文を選択すること

## ②指導の方法

- ・導入の工夫。教材文に対する児童の抵抗感を軽減する。
- ・教師の範読を聞いて、だいたいの内容をつかむ。
- ・語句や文法に関することは教師側から教える。
- ・内容を完全に理解してから音読に入る。

## 3 実際の指導例

三省堂教科書「学びを広げる」を使っての実践例を述べる。

### (1) 同書を選んだ理由

- ・分かりやすい漢詩が収録されており、音読暗唱などで古典への導入が図れるこ  
と
- ・平家物語が収録されており6学年への歴史学習への橋渡しとなること。  
特に杜甫は中学高校でも学習するので、この学習で人物名を記憶させておくと  
よい。

### (2) 基本的な方針として

- ・漢字ばかりの文への抵抗感をなくす。そのため導入部で興味を抱かせるように  
指導法を工夫する。
- ・内容の意味、読み取りは考えさせない。教師側から教える。読み取りよりも音  
読を重視する。
- ・古典は外国語ととらえる。外国語はリスニングから入る。古典もリスニングを  
重視、耳から入った言葉を自分も真似てみる、何回も音読するという学習を繰  
り返すようにする。
- ・中学校の古典指導との差別化を図る。文法はあえて触れない。音読中心の授業  
をする。

以上の基本方針を踏まえ、授業の展開を以下のように考えた。

### (3) 授業の実際

#### 【「絶句」の学習】

##### ○ 漢詩に興味を抱かせる段階

- ・ワークシートの活用。<sup>(\*)</sup> ワークシートによりだいたいどんな話なのか、想像さ  
せ  
る。

##### ○ 教師の範読を聞いてリズムや響きを感じる

- ・この段階では内容は詳しく教える必要はない。児童が範読を聞きながら内容に  
ついて想像をふくらませる段階である。

- 語句の意味を知る
  - ・語句の意味を説明する。合わせてどんな情景を詠った詩なのか説明する。
- 教師の範読をもう一度聞く段階
  - ・内容を確認しながら聞く。
- 各自分で「絶句」の原文を読む段階
  - ・すらすら読めるように練習する。
- 原文を一文ずつ、教師の範読に続いてクラス全体で声に出して読む段階から朗読の段階へ
  - ・前段階から理解の早い児童は朗読に音読は移っているはずである。ここでは全員が個別に朗読できるようにする。

#### (4) 結果

今回の授業に関し次のような結果を得た。

問1 今回の授業の感想（調査人数30人）

楽しい	27人	どちらかといえば楽しい	3人	どちらかといえば楽しくない	
楽しくない		各	0人		

問2 楽しい理由（複数回答可）

音読が楽しい（リズムがある）	20人
簡単に教材文を暗記できる	8人
新しい言葉を知る	18人
入試に役立つ	2人

さらに追跡調査として同様の指導法で「春曉」を試みた。これも同様の結果を得た。さらに「絶句」「春曉」ともほとんどの児童が暗唱できた。これは教材文への興味関心が最後まで持続できた結果である。

#### 4 音読だけに的を絞った指導と児童の興味への因果関係

- (1) 中学校・高校の現代語訳を中心とした単元構想では古典嫌いを増やすという結果が出ている。
- (2) 文法等は教師側が教え、音読に絞った小学校の指導では教材文に高い興味関心を持続したまま授業を終えることができた。

#### 5 まとめ

小学校の古典学習において児童に古典への関心意欲を高めるためには音読指導が最も有効である。

## なぜなら

- ・児童が古典嫌いになるのは現代語訳のために文法等を学ばなければならないからである。
- ・小学校の古典学習では敢えて文法は教師側から全て教えて音読に的を絞った指導をしたら、高い興味関心を持続した
- ・また、ほとんど古典を暗唱できるなど、最終的にも学習成績がよい結果になった。

## 継続的教科指導のために

- ・年間指導計画を工夫したり、社会科歴史など、他教科との関連をもたせることが必要である。

---

(\*1)

(\*2) 参考までに「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査教科・科目別分析と改善点」では古文と漢文が「好きだと思わない」、「どちらかといえば好きだと思わない」と否定的な回答をした生徒は古文72.6%、漢文71.2%に上る。

(\*3) 第3回日本語文法教育研究会(2002.7.20)において次のような結果が報告された。

### ○ 生徒の文法嫌い

#### 文法学習に関する調査(平成8年12月実施)

8割以上が「嫌い」「どちらかと言うと嫌い」を含める。127人中103人)

#### 文法嫌いの理由

1. 覚えることが多くて混乱してしまうから(37.9%)
2. 文法を知らなくても日本語は話せるから／文法用語が多く、分かりにくいから(18.4%)

#### 文法学習に関する生徒の意見

- ・型苦しく、型にはまった授業は望まない。「こういうきまりだから」という教え方も良くないと思う。文法を扱うのはテスト前が多いというのもおかしい。(3年男)
- ・どんどん進むので落ち着く暇がない。ただ、ずらずらと黒板に書くだけでなく、もっと楽しみながら習いたかったです。(3年女)

### ○ 教え込み指導に陥る原因

#### ① 文法知識の習得・定着を指導目標としている

教科書を読み進めながら文法事項を説明→問題集などでドリル演習→問題の解説

◇教師主導で学習が進められ、生徒の主体的な活動が保証されていない

例)「動詞は動作や作用や存在を表す語で、活用があり、言い切りはウ段で終わる。」

だが「いる」は動作も作用も表さない」と感じる生徒もいるだろう。

◇実際の言語表現を取り上げないので、学習内容と言語活動との関連性が感じられない。

例) 主語と述語が文の骨格を形成すると学習するが、実際の文章では往々にして主語が省略される（文章における主題の連鎖と主語の省略は簡単に触れるべき）

② 古典文法学習の準備、高校入試の準備と位置づけられている

活用が重点的に指導される（3時間配当にもかかわらず、10時間も実施した例も）

◇活用は高校古典の基礎知識であり、現代語の場合を理解しておくと古典語の場合も理解しやすいと考えられている（多くの生徒は高校進学時に忘れている）

助動詞の識別・品詞の識別の問題が入試問題によく出題される

◇解釈に関わらない品詞の識別は入試のための知識に過ぎない

③ 指導内容が日本語の現状を反映していない

(\*4) 以上2点は『教育科学国語教育 NO 743』p 91～93、山本直子氏の指摘より。

(\*5) 以上4点は前掲書p 97～98、中村敦夫氏の指摘より。

(\*6) 前掲書P 8において、香西秀信氏は次のように述べている。

「近・現代の散文は、その多くが黙読される一目で見られる一ことを前提にして書かれているという、ごく常識的な意見に過ぎない。黙読されることを前提にして書かれるのであれば、当然ながら、文章の様々な技巧もそれに合わせて発達する。」

(\*7) 別紙の通り。

# 漢詩を読もう①

## 五年組（）

絶句

杜甫

江口鳥逾□

水は□に澄んで、  
鳥はいよいよ□に見える

山口花欲然

山は□に色づいて、咲いている  
花はまるで燃えるように鮮やかだ

今春看又過

今年の春もみるみるうちに過ぎ  
てゆく

何日是帰年

いつになつたら故郷に帰れるの  
だろうか

☆ □の中に何色が入るか考えてみよう

①

②

③

## 漢詩を読みもう②

五年組( )

春曉

孟浩然

春眠不覚暁 春眠暁を覚えず

处处聞啼鳥 处々啼鳥を聞く

夜来風雨声 夜来風雨の声

花落知多少 花落つること知る多少

「春曉」の世界をイメージしよう テスト三題

① 一年のうちで一番眠い季節は? ( )

② 朝に鳴き声が聞こえる動物は? ( )

③ 春に散る花の代表は? ( )

## 評

### ○現行の学習指導要領では

現行の学習指導要領から、小学校でも古典が取り上げられるようになりました。小学校学習指導要領解説国語編の国語科改訂の要点には「我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつないでいくことができるよう内容を構成している。」とあります。「低学年では昔話や神話・伝承など、中学年では易しい文語調の短歌や俳句、慣用句や故事成語、高学年では古文・漢文など」を取り上げることとし、伝統的な言語文化としての古典に低学年から触れ、生涯にわたって親しむ態度の育成を重視しています。

### ○高学年における古典の学習

高学年では、「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り音読することや、古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。」が、学習内容として示されています。本研究では、「音読」に焦点を当て、その有効性について検証されました。平家物語が琵琶法師によって伝承されたことはよく知られていますが、本研究に「古典は紙で読まれることを前提に残されない。声で伝承されることを前提に残されている。」とご指摘があるように、「音読」は古典特有のリズムを楽しむことのできる大変効果的な指導方法の一つです。「聞く心地よさ」と「声を出す心地よさ」を同時に得ることのできる「音読」に注目されたことは、小学校における古典の学習において極めて重要なことです。

### ○子どもの実態から

授業は、子どもの実態から組み立てていくことが大切です。目の前の子どもたちの様子だけでなく、「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査・科目別分析と改善点」や第3回日本語文法教育研究会の報告などからの情報を踏まえながら考察を重ね、授業計画を立てられました。「学習指導要領に加えられたから指導する」という発想では、子どもたちに「伝統的な言語文化としての古典に触れ、生涯にわたって親しむ態度の育成」は图れません。目の前の子どもたちと指導内容との接点を真摯に見つめ、どうしたら楽しく効果的な学習が成立するかが考えられた、優れた研究であると思います。

### ○発展として

「読書百遍意自ずから通ず」と言いますが、音読や素読は、藩校や寺子屋などできかんに行われていた学習法です。何度も読み込むうちに意味が分かってきたり、どうしても意味を知りたくなって進んで調べるようになったり、その効果は体験的に実証されてきたものもあるようです。

本研究では、リズムがあり、新しい言葉を知ることもできる音読を楽しいと感じ、喜んで学習を進めている子どもたちの様子が目に浮かびます。小学校段階では、高学年においても「内容の大体を知り音読すること」と「解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること」が指導事項であり、文法についての学習はしなくてよいことになっています。しかし、寺子屋式に考えれば、音読によって古典の学習が楽しくなった子どもたち自らが、他の古典にも当たったり意味を調べ出したりしたとしたら、こんなに喜ばしいことはありません。